

| | |
|-------------|---|
| Title | 撫近門の扁額に就いて |
| Author(s) | 山本, 守 |
| Citation | 東洋史研究 (1937), 2(3): 287-288 |
| Issue Date | 1937-02-23 |
| URL | http://dx.doi.org/10.14989/138720 |
| Right | |
| Type | Journal Article |
| Textversion | publisher |

撫近門の扁額に就いて

山 本 守

東洋史研究一卷五號に於いて今西學士

が撫近門の扁額に關する疑問を載せてゐられるが私は今度奉天に常住するに至つたので、昨二十二日わざ／＼大東門にそれを調べに行つた。所が遺憾ながら滿文の而も問題たる國號の所が讀めない。已むを得ず博物館に引返して双眼鏡を持ち出し、酷寒と戦ひながら扁額と睨み合ふこと實に一時間、身體がもたなくなつたので引き上げた。今その概略を記す。

現在の大東門の南北兩口の内側には漢文にて、外側に滿文が記されて居るわけである。南口内側には明らかに「撫近門」と記しその右側に「大金國天聰五」とあり左側に「年孟夏吉且立」と讀まれる。北口の中央の「近」の字と「大金國天聰五」の文字は舊いが「撫」「門」及び左側の小字

は之を新しく補修して居る。

次に滿文の方であるが南口の外側には次の如く掲げられて居る。(北口の外側には枠のみで扁額は取除かれて居る)

Hancikibe

近處ヲ

Haindara

撫

duka

門

と讀まれる。無圈點なる爲に、hancikibe の ha に、be にも圈點を附せず duka も同様である。以上の三字は文字大なる爲問題なく讀みとれたが、その左右の小文字は讀みとれなくて弱つた。然し辛うじて肝心の國號も判讀出來た。その文は次の通りである。左側は

aisin gurun sure han i sunjaci
金 國 天聰 汗ノ第五

ainya
年
であり右側の文字は僅かに

biyai sain
月ノ吉

の二字を判讀し得たに過ぎない。これに據れば國號は tacin でも無ければ taicing でもない。正しくそれは aisin である。

この aisin が滿洲語の「金」の意なるは周知の如くである。又天聰四年の紀年ある遼陽の喇嘛墳にも、大金の國號が見え、これに對して滿洲文は aisin gurun と記されて居る。して見ると滿洲語の名稱

aisin gurun と漢文名の「金國」とは意味上の關聯のみで、音の上の關聯なく、従つてそれを“cin gurun”とは當時未だ云はなかつたかも知れない。それが後に國號改正の問題に逢着して始めて音の關聯が考慮せられるに至つたものではあるまいか。

次にこの字體に就いてあるが gurun の gu は蒙古字 gu の形をなし sure の

□ も同じく蒙古字 □ の形をとつて居る様に見られた。初期滿洲文字の資料としても又興味あるものと思ふ。

尙一言附け加へて置き度いのは故宮の中に保存せられて居る扁額である。こゝにも漢文の撫近門——左右の年號なし——と滿文の “hancikibe”・“hairandara” なる二個の扁額がある。——“duka” の部なし。——而もこの方は有圈點文字である。この外に「懷遠門」の扁額と

gorokibe gosira duka
遠方ヲ 撫ム 門

なる滿文の扁額がある。この滿文のものには明らかに乾隆二十七年重修と記してあるにも拘らず無圈點文字である。故に私の考ふるには、乾隆帝が扁額を重修するに當つて、一つは舊來のまゝのを作り、一つは有圈點文字のを作つて、門の南口と北口とに掲げたものではあるまいかと云ふ事である。撫近門も南口のは現存するが、北口のは現存しない爲、その點不明であるが、故宮にある有圈點のものが、或はその北口

に掲げられて居たものではあるまいかと思はれる。附記して諸賢の御教示を仰ぐ次第である。(十二月二十三日稿)

× × ×

今西曰く。小生曩に孟森氏の疑問を傳ふるに併せて小生自身の疑義を以てし、特に奉天在住の士の示教を賜はらんことをお願ひしておいた處、こゝに山本氏の明瞭な解答を得て悦びと深謝に堪えません。之に據つて金梁氏が其の著「光宣小記」に記す所、即ち「撫近門の額款は漢文大金であるが、滿文の方は却つて即ち後來通用の大清である云々」の文言が實は無根の記述であつたと判明した次第です。金梁氏にはお氣の毒であり、又金清二音相似説の有力にして興味ある一資料と考へられたものが實はさうでなかつたといふことは残念と云はゞ残念にも似てゐますが、然し我々は山本氏の勞を多とし、且つ學界のためにこの一事だけでも明決されたことを慶祝すべきだらうと存じます。

滿洲の國號問題に關しては本誌前號にも三田村君の所説があらはれたりしましたが、然し未だ未だ滿洲乃至この金清と一聯をなす所の國號問題が一切の疑義を拂つたといふ風には考へられません。と申して今小生自身にもこれぞといふ考へがあるわけでなく、これから諸賢の驥尾に附して勉強したいと思つてゐる程に過ぎませんが、然しこの問題のためには、今回取り上げて見た様な零細に似た事柄も、實は一つ一つ明確に解決され決定されてゆかねばならぬと考へるのです。

尙山本氏は懷遠門の扁額重修に際し、乾隆帝は有圈點無圈點兩種文字のものを作つたらしいと述べてゐられますが、このことは、同じく乾隆帝が無圈點老滿文原檔を重修するに當つて殊更原の儘の無圈點のものとしてから新しく有圈點のものとを作つたことを思ひ併して見たならば、又かゝることの有り得たことを推察するに難からざるものがありませう。(十二・二十)